

もう一つのむかしのかがみ

山武地区の古墳についてはたびたびお伝えしてまいりましたが、今回は追認という形でお伝えします。



森台古墳群（北野支群空撮）

山 武郡地域の中でも特に山武市は鏡を持つほどの位の高い人物がいたことが証明された事例です。
写真の森台古墳群は、森地区の旧出光村の保養施設建設に伴い発掘調査が行われました。鏡が発見された古墳は森台古墳群中の北野5号墳で方形のかたちをした方墳と呼ばれているものです。

古墳の大きさは13m×13m。古墳の周りには周溝という溝が巡り、大きさは20m×21mになります。鏡は重圏文鏡と言われるもので、人骨（上腕部）の付着が見られました。このことは埋葬された人物に鏡が副葬されていたことの証です。また、硬玉製の勾玉2点・緑色凝灰岩製の管玉8点・水晶製の有稜棗玉1点・ガラス小玉58点などが鏡の周辺から発見されました。



重圏文鏡（5号墳）

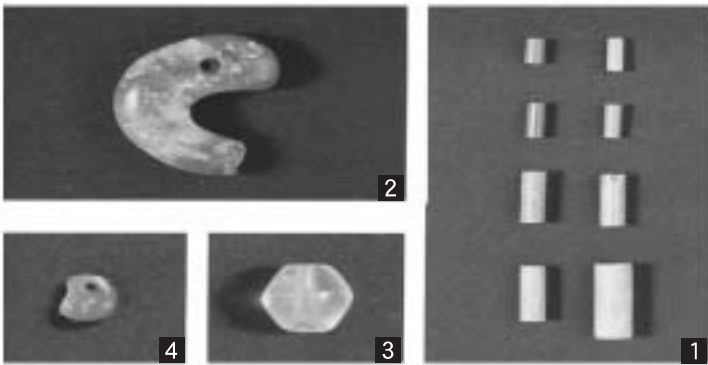
身

につけた人物はおそらく官僚的クラスの地位を持った人物かまたはそれに近い地位を賜った地域の人物等と考えられます。いずれにしても鏡を持てるほどの人物が4世紀の後半代に山武郡地域に存在した事実は確実で、地域を統治していたのでしょう。

重圏文鏡の特徴ですが、文様がある面が背面です。円（円の凸状のもの）が鏡の中心部から二重にめぐり、櫛歯文帯が配され、三重に外側へめぐりまた櫛歯文帯を配す単純な文様で、径は6・2cm、重さ21・7g、厚さは1cmから2・5cmです。また、ガラス小玉58点はすべて鋳型により作られたものではなく、溶かしたガラスを棒状の工具に巻き付け、一つ一つカットした技法を採用していたようです。今では原始的な技法であり大量生産はできません。それだけに時間をかけた分価値があったのでしょう。

このように、山武市から鏡が発見された古墳は、島戸墳1号墳4面、北野5号墳1面、計5面がここ十数年の

間に確認されたことは、発見されるまでは山武郡地域では古墳時代前期（4世紀）古墳の空白地帯でした。該期の銅鏡発見の調査事例は山武郡内の古墳の様相を一変する資料となり、今後の古墳の動向を探る上で貴重な資料と言えますでしょう。



- 1 緑色凝灰岩製の管玉
- 2 硬玉製の勾玉
- 3 水晶製の有稜棗玉
- 4 水晶製の有稜棗玉